

実践事例2

静岡県立御殿場南高校

複数の教師による評価や生徒同士の相互評価で、自己理解を促し、多様な資質・能力を育む

静岡県立御殿場南高校は、教科学習や部活動、キャリア教育など、あらゆる教育活動を「Cプロジェクト」として体系化し、生徒の人間的な成長を総合的に支えている。3年間を通して、生徒に気づきを促す教師の働きかけや生徒同士の相互評価など、形成的評価に重点を置き、生徒の客観的な自己理解を助け、多様な資質・能力を育てている。

取り組みの概要

あらゆる教育活動を

「Cプロジェクト」として体系化

静岡県立御殿場南高校は、「地域に貢献する優れた人材を集い育成する」という意味である「鍾駿しょうしゅん」を建学の精神に掲げる。その実現に向け、2013年度から「Cプロジェクト」(CはCareer・Challenge・Creativityの頭文字。以下、プロジェクト)に取り組んできた。進路指導主事の樋口ゆり子先生は、当時の生徒の姿を次のように振り返る。

「本校の生徒は、積極性や主体性に課題が見られ、潜在能力が十分に

あっても、それを発揮し切れていませんでした。また、人間関係づくりに消極的な生徒も目立ちました」

そこで、生徒の人間的な成長を促そうと考え、教育活動全体を体系化した。1学年主任の望月満子先生は、プロジェクトのねらいをこう語る。

「生徒の将来を考えて行っていた取り組みを体系化させることで、さらに大きな教育効果が得られると考えました。教科学習や学校行事、キャリア教育、部活動、生徒会活動など、あらゆる教育活動を有機的に結びつけ、生徒の生涯の成長を見据えた指導に発展させることを目指しました」

プロジェクトでは、まず教師間で目指す生徒像を共有しようと、文部科学省がキャリア教育で育成すべき基礎的・汎用的能力として示した4領域(*1)を基に、同校の実態を踏まえて、育成すべき資質・能力を具体化。それらの資質・能力の育成に向け、各学年や各教育活動における指導目標を設定した(P.18図1)。

生徒の成長を促すための形成的評価を重視

17年度には、静岡県教育委員会「ネオアドバンススクール」の指定を受け、早稲田大学・日向野幹也教授の

指導の下、プロジェクトにリーダーシップ教育を組み込み、一層の充実を図っている。キャリア教育主任の平井剛先生はそのねらいをこう語る。

「リーダーシップを身につけることで、生徒は目標共有・率先垂範・同僚支援の3要素を意識した行動を取れるようになり、教科学習だけでなく、学校行事や部活動など、教育活動全体で主体的・対話的で深い学びができるようになると考えています」

プロジェクトの軸となる活動は、「総合的な学習の時間」に行う「鍾駿ゼミ」だ。1年次では「社会を知る」をテーマに職場訪問や大学訪問、2年次では「他者を知る」をテーマ

*1 「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4領域となる。

静岡県立御殿場南高校

◎校訓は「心は広く豊かに、志は高く大きく、日々の努力を惜しまない」。知力、精神力、体力に優れたリーダーの育成を目指し、「文武両道」の教育活動を実践。生徒が地域でのボランティア活動に積極的に取り組む伝統がある。

◎設立 1963（昭和38）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約200人

◎2017年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、筑波大、横浜国立大、山梨大、静岡大、静岡県立大などに30人が合格。私立大は、青山学院大、中央大、東京理科大、法政大、明治大、立教大などに延べ402人が合格。

◎URL <http://gonan.jp/>



平井 剛 ひらい・たくし
静岡県立御殿場南高校
同校に赴任して3年目。キャリア教育主任。1学年特進クラス担任。英語科。



奥山 達生 おくやま・たつお
同校に赴任して2年目。研修主任。理科。



望月 満子 もつしげ・みこ
同校に赴任して8年目。1学年主任。国語科。



樋口ゆり子 ひぐち・ゆりこ
同校に赴任して6年目。進路指導主事。理科。



櫻井 教文 さくらい・けんぶん
同校に赴任して1年目。

図1 「Cプロジェクト」の概要

キャリア教育で育成すべき資質・能力（基礎的・汎用的能力）

人間関係形成・社会形成能力

- 他者の意見をしっかりと聴く姿勢を身につけている。
- 他者の意見を尊重しつつ、自分の意見を述べることができる。
- 自分の役割を認識し、他者と協力してお互いを高め合う集団をつくることができる。
- 多様な人々と適切なコミュニケーションを取ることができる。
- 学校行事に主体的（積極的）に参加することができる。

自己理解・自己管理能力

- 基本的な生活習慣を確立し、規則を守って生活することができる。
- 自分の個性を磨き、能力を伸ばそうとしている。
- 社会とのかかわりから自分の特徴に気づき、自分らしい生き方について考えることができる。
- 自ら決めたことに対し、最後まで責任を持つことができる。
- 自立心を持ち、場面に応じて適切に行動できる。
- 心身ともに健康で強い意志とたくましい実践力を持っている。

課題対応能力

- 苦手教科の学習にも創意工夫しながら取り組むことができる。
- 時間を有効に活用できるように生活リズムを組み立て、学習とほかの活動との両立を図ることができる。
- 目標達成のために必要なことを分析し、それに対応した学習や活動を行うことができる。
- 困難なことに直面しても、最後まで努力して取り組み、解決しようとする。
- 自らの課題に気づき改善しようと努力している。

キャリアプランニング能力

- 働くことの意義を理解し、自分自身のあり方、生き方について主体的に考えている。
- 将来に基づいて、今行うべき学習や活動の意義を理解し、意欲的に取り組んでいる。
- 職業についての総合的な理解に基づいて将来を設計し、進路計画を立案している。
- 進路目標達成のために諦めずに粘り強く努力できる。
- 社会における自分の役割を見つけ、広く貢献しようという意志を持って進路選択している。

キャリア教育の視点に基づく各学年の指導目標

第1学年「社会を知る」

- インターンシップ、職場見学、研究所見学、高大連携等の行事を通して、社会と職業、学問、自分の適性について知り、将来設計をさせる。
※社会とは学問等を含めた広い意味

第2学年「他者を知る」

- 他者の価値観や個性を認識し受容する態度を身につけさせる。
- 修学旅行を通して責任感や連帯感を育成する。
- 目的意識を持ち、希望進路を具体的に設定させる。
- 進路実現までのプランを作成させる。

第3学年「自己を深める」

- 自己の能力やその可能性、興味・関心、適性を踏まえ、卒業後の進路について具体的な目標を定め、実行に移させる。
- 進路に必要な学力を身につけさせる。
- 進路実現に向けて主体的に考え、行動し、粘り強く努力させる。

教科

- 生徒の活動、理解度が見える授業を行い、生徒の主体性を育む。
- 生徒の進路目標達成のための学力の伸長を図る。
- 今の学びが、将来どのようにつながっていくのかを理解させることで、学習意欲を向上させる。

総合的な学習の時間

- 体験活動や講話を通して自己の可能性や役割を理解し、主体的に進路選択できる能力を育成する。
- 発達段階に応じたプログラムを準備し、進路意識の高揚を図る。
- 3年間を通じた小論文指導計画を立案・実施することにより、自らの考えを他者に伝える力を養う。

特別活動

- 集団の中での自己の位置や果たすべき役割を自覚させ、コミュニケーション能力を高める。
- 行事に積極的に参加し、成功させることによる達成感を体験させ、自己肯定感、自己有用感を持たせる。

部活動

- 自己の役割を果たし、集団の目標を達成するための行動ができるようにする。
- 成果と課題を分析し、具体的な対策を考え実行できる能力を育成する。
- 活動の効率化、休養日の設置、学習時間の確保（保障）をする。

* 学校資料を基に編集部で作成

に学部学科研究に取り組み、アメリカ・ハワイへの修学旅行などを行う。そして、3年次では「自己を深める」をテーマに、1年次からの学びを基に希望進路を決め、その目標に向けて主体的に行動する。また、1・2

年次では、各活動における経験を自分の将来に結びつけさせるために、「論文研究」を行う。プロジェクトは、そのような3年間の多様な活動を通して、生徒に気づきを促し、じっくり成長を図るも

のだと言える。生徒がより大きく成長するためには、生徒自身が自分の強みや課題を把握し、向上心を持って取り組むことが大切になる。そこで、どの活動においても形成的評価を行い、生徒が活動を振り返り、メ

タ認知をする場面を設定している。

1・2年次の取り組み

入学後のガイダンスで身につけてほしい資質・能力を説明

プロジェクトの1・2年次の取り組みを具体的にみていく。まず、1年次の4月のオリエンテーションでプロジェクトの概要と3年間で身につけてほしい資質・能力を説明する。

「生徒の多くは、大学進学を希望しています。しかし、大学合格が最終目標ではありません。高校3年間を通して、大学で何を学び、どのような人生を送りたいのかを考えてほしいと伝えます」（樋口先生）

1年次の活動は、「企業職業研究」と「大学研究」が中心となる。

「企業職業研究」では、保護者への職業アンケートや社会人講話などを通して、人生観や職業観を築いていく。夏季休業中に行う職場見学や仕事体験では、気づいたことをレポートにまとめ、それを2学期に各クラス内で発表。さらに、一連の活動を振り返り、それらをまとめて学年発表会でポスターセッションを行う。

そうして描いた将来像の実現に必

要な学びを理解するために行うのが、「大学研究」だ。自分の適性を踏まえて文理選択を検討したり、大学・学部・学科を調べたりする。12月の大学訪問では、早稲田大学・横浜市立大学・山梨大学・都留文科大・山梨県立大学のいずれかを訪れ、模擬授業を受けたり、大学生と交流したりする。この活動でも、グループごとに気づきや学びをまとめたポスターを作成し、クラスで発表する。

3つの観点による相互評価で自分のよい点に気づかせる

これまでも振り返りに相互評価を行っていたが、今年度から始めたのが「SBIフィードバック」(図2)による相互評価だ。グループ内でメンバーそれぞれについて「状況」「具体的な行動」「あなたに与えたインパクト」を書いて見せ合い、活動でよかった点を相互評価する。例えば、「あの場面でこんな質問をしてくれたことが、自分の思考を深めるきっかけになった」といった内容で、3つの観点を具体的に書くことでよさが伝わりやすくなり、評価される側がメタ認知をしやすくなるという。

「自分は目標にどの程度到達したのか、形成的な評価を行う場となっています。発言に消極的だった生徒が、友人によさを認められて自己肯定感が高まり、次第に積極的になる姿がよく見られますし、評価する側も、友人のよい点に影響を受けることが多いようです」（樋口先生）

同校では、他者を評価する力をリーダーシップの資質の1つと捉え、授業でもフィードバックの場面を設定している。

「担当する理科の授業では、グループワーク後、付箋紙にメンバーの評

図2 「SBIフィードバック」

*グループのメンバーのよかった点をフィードバックする。

1人目の氏名	状況 (Situation)	具体的な行動 (Behavior)	あなたに与えたインパクト (Impact)
コメント			
2人目の氏名	状況 (Situation)	具体的な行動 (Behavior)	あなたに与えたインパクト (Impact)
コメント			
3人目の氏名	状況 (Situation)	具体的な行動 (Behavior)	あなたに与えたインパクト (Impact)
コメント			

「SBI」は、「状況 (Situation)」「行動 (Behavior)」「影響 (Impact)」の頭文字。米国リーダーシップ教育機関のCCLが開発。*学校資料をそのまま掲載

価を書き、よさや改善点を伝え合っています。1年生でも、フィードバックを繰り返すうちに、他者を評価した内容を的確かつ具体的に伝えられるようになります」（樋口先生）

論文作成で経験が自身の成長にどう関連しているか気づかせる

プロジェクトにおける活動を関連づけ、自身の成長を振り返り、将来を考えさせる場が「論文研究」だ。1年次の5月、「SDGs」(※2)の17の目標について説明し、自分がかかわりたい目標をテーマに1年間かけて論文を作成させる。

「論文には、職場訪問や大学訪問などの経験、そこでの気づきや学びを積極的に盛り込むように指導します。多様な教育活動が自分の成長に関連し合っていることに気づき、どのような資質・能力が伸びているのかを客観的に把握し、認識する場になっています」（平井先生）

論文作成の途中では、生徒同士で読み合い、感想を述べたり、質問し合ったりする場を何度か設け、相互評価を行う。2月には完成させ、学年発表会でその概要を発表し合う。

* 2 Sustainable Development Goalsの略。2015年9月の国連総会で採択された『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ』で示された具体的な行動指針。「あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ」「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する」など17の目標がある。

2年次では、1年次での学びを通じて見えてきた将来像を基に「学部学科研究」を行い、夏季休業中に志望校のオープンキャンパスに訪れる。その体験はA4判紙1枚のレポートにまとめ、廊下に貼り、生徒間で情報を共有する。10月にはハワイ修学旅行の計画をグループごとに立てる。現地では大学生との交流や文化に触れる活動を通し、「他者」を知ることで、「自己」への理解をより深めることをねらう。

「キャリアプラン表明書」作成

プロジェクトの集大成となる「キャリアプラン表明書」

1・2年次の活動の集大成が、2年次12月から取り組む「キャリアプラン表明書」(図3)だ。その作成は、それまでの活動を整理し、生徒が自分の志向性や課題を把握して、将来や進路選択を深く考える場となる。

まず、「自己分析シート」でプロジェクトでの学びを振り返り、自己理解を深め、キャリアプランを考える(図4)。その時に参考にするのが、各活動で書いたワークシートなどをまとめたレポートフォリオだ。

生徒は「自己分析シート」を冬季休業前までに提出し、担任はそれを基に個別面談をする。研修主任の奥山達生先生は次のように説明する。

「自己評価や他者評価を何度もしてきた成果かもしれませんが、多くの生徒が奇麗な文章でまとめてきます。ただ、その段階ではほとんどが表層的・抽象的な文章です。そこで、面談で気になる点を一つひとつ指摘し、自己の内面を再度振り返らせ、自分の言葉で書くように伝えます」

その際、生徒の思考を促す質問をするよう心がける。そのために、教師の質問力を高める研修も行った。

「教師は教えるだけでなく、生徒に問いかけ、気づかせて、考えさせる指導も重視します。生徒への質問は、『イエス・ノー』などの択一で答えられるクローズド・クエスチョンや、5W1Hを問うオープン・クエスチョンを効果的に使うよう心がけています」(平井先生)

担任・学年主任・管理職による多面的評価で思考を深化させる

生徒は、面談を踏まえて内容を再考し、冬季休業中に「キャリアプラン

図4 「自己分析シート」の記入項目

I 「Cプロジェクト」全体の振り返り

- 1 仕事について：1年次の企業職業研究(企業訪問)やこれまでに聞いた講演、2年次の修学旅行におけるキャリアセミナー・プロジェクトパラダイスなどを通して感じたこと(1年次にまとめた「Cプロジェクト」のファイルを活用)。
- 2 大学について：1年次の大学訪問や、2年次の大学調べ、オープンキャンパスを通して気づいたこと、考えたこと。
- 3 論文研究(ブックトーク)：新書を読んで感じたこと、考えたこと。

II 自己理解

- 1 これまでの人生で頑張ったこと、印象に残っていること、自分にとって影響の大きかった出来事(授業、部活動、ボランティア活動、旅行など、今までの経験、体験を振り返り、できるだけたくさん箇条書きで書いてみよう。つらかったこと、乗り越えたことなど)。
- 2 上記1のことから、学んだこと、成長できたこと、自分自身の性格、自分の強み(P.Rポイント)など。

III キャリアプラン

- 1 大学で勉強したいこと。
- 2 自分の進みたい分野や職業をイメージしよう。また、その分野や職業の特徴は何だろうか。(できるだけたくさん箇条書きで書いてみよう)
- 3 今起きている社会問題や現代社会における課題など、知っていることを挙げてみよう。
- 4 10年後、自分が将来、かかわっていききたい分野がどのように社会に役立っているのかを書いてみよう。

図3 「キャリアプラン表明書」

The form is divided into two main sections: '裏面' (Back) and '表面' (Front).
 The '裏面' section contains several prompts for reflection:
 - 「社会(他者)を知る」: 自分が将来、関わっていききたい分野がどのように社会に役立っているのか書いてみよう。(問題意識の整理)
 - 「志望校を考える」: 自分で考えた内容にこれから関わる上で、また、身につけたい知識、能力について書いてみよう。
 - 「自己理解」: これまでの人生で頑張ったこと、印象に残っていること、自分にとって影響の大きかった出来事等を書いてみよう。
 - 「進路について」: 自分が進みたい大学を書いてみよう。
 - 「社会問題」: 自分が進みたい大学から、他大学にない問題や課題を挙げてみよう。
 The '表面' section contains:
 - A header with fields for '所属() 氏名() 年月日提出'
 - A title: 『キャリアプラン表明書(清書)』
 - A main writing area for the statement.

*学校資料をそのまま掲載

*学校資料を基に編集部で作成

ン「表明書」の下書きを作成。担任による2回目の面談を受け、その内容を反映して清書する。そして、学年主任、続いて管理職の面談を受ける。教頭の櫻井^{さくらい}教文先生はこう語る。

「私が面談をする段階では、担任と学年主任の面談を通して、生徒はかなり深いところまで考えており、口頭での説明もより分かりやすいものになっています。それでも、さらなる高みを目指して、違う角度から質問をして思考を深めさせます」

そのように、複数の教師から評価を受けて繰り返し書き直し、考えに考え抜いた「キャリアプラン表明書」を完成させた生徒は、深い自己理解に基づいた目標が明確に定まり、3年生になると希望進路の実現に向け、一直線に頑張る姿が見られるという。

体制の工夫

指導方針や方法、資料など
全教師で共有を徹底

プロジェクトでは、全校で指導方針や指導方法を共有し、3年間での一貫した指導の実現を図っている。

「教育目標や目指す学校像・生徒像、学校経営目標などの体系にプロ

ジェクトを明確に位置づけて、そのプログラムを構築しています。そのため、各活動の目的や意図の共有がしやすいと思います」(櫻井教頭)

17年度は全体研修を4回行い、外部講師を招き、リーダーシップ教育やカリキュラム・マネジメントへの理解を図った。さらに、学年間では資料の共有を丁寧に行っている。

「ワークシートなどの資料はすべてデータ化して蓄積し、共有フォルダに分かりやすく整理していることも、指導や評価方法の共有に役立っていると思います」(樋口先生)

成果と展望

自分を深く理解するからこそ
将来を選ぶ姿勢に変化が

プロジェクトの成果は、特に生徒の希望進路に対する姿勢に表れている。例えば、「キャリアプラン表明書」では、自分がかかわりたい職業や学問分野が「どのように社会に役立っているのか」を400字程度で書く。

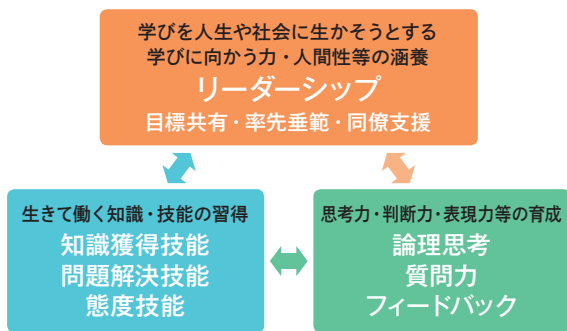
生徒は、志望分野の社会的役割を、それまでの経験から気づいた自分の適性を踏まえて考える。すると、将来への期待が一層高まり、希望進路

の実現に向けた意欲がさらに向上することもあれば、自分の適性に自信が持てず、本当に進むべき道なのかを考え直す場合もある。

そうした過程を経るからこそ、自分に最適と思う希望進路を見いだすことができる。過去には医師から看護師へ、雑誌記者から歴史学者へと、希望進路を転換した生徒がいた。

17年度は、リーダーシップ教育を導入し、実践を進める中で、「育成を目指す資質・能力」を改めて定めた(図5)。リーダーシップを資質・能力の1つと捉え、知識・技能、思考力・判断力・表現力をスパイラルで伸ばすことを目指している。

図5 育成を目指す資質・能力



* 学校資料を基に編集部で作成

eポートフォリオを導入し、
活動を振り返りやすくする

課題は、大学入試改革も見据えたポートフォリオの電子化だ。既に「Classi」(*3)を導入し、生徒が活動の内容や得られた気づきをスマートフォンなどから入力できるようにした。今後、生徒が自分で成果物を撮影して保存・整理するなど、コンテンツをデータ化し、eポートフォリオにする予定だ。

「資料の保存や整理は、デジタル化した方がはるかに効率的です。もちろん、書ききかたらず学習効果もあるので、目的に応じて使い分けたいと考えています」(望月先生)

さらに、ルーブリックを用いたパフォーマンス評価を教育活動全体で推進中だ。17年度は、各教科でルーブリックを作成。プロジェクトでは生徒が学びの成果等を振り返る評価シートを導入した。18年度は教科横断、19年度は行事も含めた教育活動全体のルーブリックを作成予定だ。

「これからも『Cプロジェクト』において教育活動全体を体系的に整理し、指導と評価の改革を押し進めたいと考えています」(平井先生)

* 3 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。